キネマの楽しみ

大正から昭和の初期にかけては、映画が娯楽の中心でした。新宿には洋画封切りの武蔵野館やセカンド館の昭和館、日活封切りの帝都座や松竹館など数多くの映画館が集まり、大変な賑わいをみせていました。

無声映画と武蔵野館

特に武蔵野館は、まだ新宿が場末であった大正 9 年（1920）に、地元の商店主が人々を呼べる文化的な町にしようと資金を出しあって建てた映画館で、700 席を擁する当時としてはかなり大きな建物でした。やがて良い映画を上映する映画館として洋画ファンに定着し、大正 12 年（1923）の関東大震災後は、被害も少なかったため連日満員の盛況となりました。

その頃はまだ無声映画の時代で、日本では字幕と場面の状況を声色よろしく解説してくれる説明者（弁士）がつきました。その映画説明者の良し悪しが映画の印象を左右するほどで、映画館に通う人々はそこの映画館の説明者のファンとして見にくることも多かったのです。

武蔵野館では、大正 14 年（1925）に主任弁士として徳川夢声を迎えています。夢声は武蔵野館に初めて出た時の感想を次のように書いています。「どうもすごい入り、一階席はまるで画面の見えない前までギッシリ、二階席も三階席も人間の鈴なり、今にも端っこの方からバラバラッと落ちそうである。かねて入りのある小屋とは聞いていたが、ほとんど垂直の真上に、三階席の客の半身が乗り出しているんだから、気味が悪い。」

（『夢声自伝 大正篇よき友、よき時代』）

新宿駅周辺の映画館（昭和10年（1935）頃）

種類	館名	開館日	定員	上映内容
邦画	①新宿松竹館	大正13年（1924）年12月31日	724名	松竹封切
	②新宿第一劇場	昭和4年（1929）9月7日	1,048名	松竹系実演劇＆映画
	③新宿劇場	昭和4年12月31日	465名	大都封切
	④帝都座	昭和6年（1931）5月1日	1,299名	日活封切
	⑤新宿帝国館	昭和6年12月31日	465名	新興封切
	⑥新宿大東京	昭和10年（1935）11月29日	1,151名	新興封切
洋画	⑦武蔵野館	大正9年（1920）6月30日	1,145名	S・Y封切
	⑧昭和館	昭和7年（1932）12月22日	420名	S・Y系　セカンド館
ニュース映画	⑨朝日ニュース劇場	昭和12年（1937）7月1日	352名	ニュース・マンガ・科学短編
	⑩新宿映画劇場	昭和12年7月14日	706名	東宝系
	⑪光音座	昭和12年12月30日	368名	名画・ニュース
	⑫新宿太陽座	昭和13年4月7日	170名	名画・短編・ニュース

＊料金は、セカンド館の普通席30銭程度から封切りの特等席1円まで／＊S・Yは、松竹映画興行社宣伝部のこと／＊セカンド館とは、封切り後に安い料金で上映する映画館
＊各映画館プログラム・『キネマ旬報』（昭和10年1月号）・「全国映画館名録」（昭和8,18年）・柴田勝「東京の活動写真（映画）常設館の変遷」より作成

外国映画にも説明者がつくので抵抗なく親しめ、人々は洋画の中に繰り広げられる欧米の文化生活や美しいスターに憧れのまなざしを送り、また、そうした映画の中から様々な流行が生まれていきました。

また、楽士が生演奏する無声映画の伴奏音楽も人々を魅了しました。無声映画全盛期には封切館はみな良いオーケストラをそろえ、映画の間に休憩奏楽も行って、蓄音機やラジオがまだ少ない当時の人々にクラシック音楽を聞く貴重な機会を与えていました。

トーキー映画時代の到来

東京随一の映画館となった武蔵野館は、昭和 3 年（1928）にこれまで建っていた新宿通りの角地を地主の三越に譲って新築移転し、さらに大きくモダンな映画の殿堂となりました。この頃から新宿駅周辺には大きなデパートや、新歌舞伎座や新宿松竹館、新宿劇場などの劇場・映画館が次々と建てられ、新宿は東京の三大盛り場のひとつと言われるほどの急速な発展をしていきました。

やがて映画の技術も進み、無声映画からトーキー映画の時代へと変わっていきます。日本におけるトーキー映画の初公開は昭和 4 年（1929）に武蔵野館で封切られたアメリカ映画『進軍』と音楽短編でした。また、昭和 6 年（1931）に武蔵野館で封切られた『モロッコ』で初めてスーパーインポーズ版（日本語字幕）が登場します。一方、日本映画で初めて本格的トーキー映画として成功したのは同じ 6 年の『マダムと女房』（松竹）で、新宿では松竹館が封切っています。

こうしたトーキー時代の到来は、これまで無声映画につきものだった楽士や弁士を不要にするもので、その解雇に反対した争議も起こりました。武蔵野館の説明部も昭和 8 年（1933）3 月には廃止され、人気弁士徳川夢声は浅草常磐座に「笑いの王国」を旗揚げし、丸山章次は映画監督に、牧野周一は漫談家に、大蔵貢は映画会社を起こしました。こうして、無声映画時代にもっていた弁士や楽士による映画館ごとの特色は失われていきました。

やがてトーキー映画にも名作が作られるようになり、主題歌が大流行した『巴里の屋根の下』や『巴里祭』の他、『自由を我等に』『モロッコ』『会議は踊る』『歴史は夜作られる』など今も人々に愛される名画がこの頃に次々と公開されていきました。

しかし、昭和 11 年（1936）頃から外国映画の検閲方針が厳しくなり、翌 12 年には輸入制限され、昭和 14 年には国策協力のための映画法が施行されるなど、戦争とともにしだいに映画の輸入や製作・興行に対する規制が強化されるようになります。そして戦争映画やニュース映画、文化映画が多く製作されるようになっていきました。

武蔵野館プログラム

新宿武蔵野館（1966）

堀潔画「新宿武蔵野館」